

「キルケゴール協会」Zoom 読書会

コロナ禍のため中断していた「キルケゴール協会」大阪月例読書会が今年 8 月、オンライン (Zoom 会議) で再開し、私も初めて参加した (実は読書会そのものも今回初参加である)。この読書会は、2016 年秋より、梶形公也大阪教育大学名誉教授の指導の下、伊藤潔志桃山学院大学准教授が世話人となって始められた。内容はデンマーク語原典でキルケゴールの日記や書簡等を読むというものだ (同様の読書会は東京でも行われている)。大阪で毎月開かれていた読書会であるが、オンライン方式になって、逆に参加しやすくなったのは有難いことだった。

参加して驚いたのは、キルケゴールのデンマーク語テキストが、その著作類はもちろんのこと、日記や書簡等も含めてすべてデータベース化され、ウェブ上で公開されていることである。紙媒体の本を買い揃えなくても、キルケゴールの全著作は脳空間の中に存在しているのである。読書会の参加者は、“Søren Kierkegaards Skrifter” というホームページ (<http://sks.dk/forside/indhold.asp>) からテキストを事前に各自ダウンロードし、梶形先生が作成された当該部分のデンマーク語単語ノート (これも事前配信) に基づいて予習した上で、実際の読書会でテキストを順番に訳読する。その後、梶形先生が丁寧な解説をつけていられる。読書会といってもデンマーク語の学習を兼ねた高度な勉強会である。テキストを原語で読む勉強会は、私にとっては大学院のゼミ以来、実に 30 年ぶりのことだ。21 世紀の日本人によって自分の手紙までもオンライン方式で読解されるとは、キルケゴールは夢にも思っていなかっただろう。

「キルケゴールのインターネット批判」

19 世紀デンマークに生きたキルケゴールにとって、同時代のジャーナリズムはせいぜい新聞か雑誌の上でのものであった。彼は風刺新聞『コルサル』に戯画が載せられ、嘲弄されるという悲痛な体験を味わわされた。そのこともあって、ジャーナリズムやこれに相関した大衆という存在に対して、彼は徹底的な批判を行った。単独者の概念も、実はこうした実体験を反映していると言えるだろう。

19 世紀の先端メディアが日刊新聞であるとすれば、20 世紀は放送 (ラジオやテレビ) であり、21 世紀の現在ではインターネットが大きな地歩を占めている。もしキルケゴールがインターネット、とりわけソーシャルメディア (SNS) の普及した今日の世界を見たら、何と言うだろうか。そんな問いに答えるのが、パトリック・ストークスの「キルケゴールのインターネット批判」⁽¹⁾ である。ストークスはキルケゴールのメディア批判をさまざまな角度から論じているが、面白いのはストークス自身の SNS 観を披歴した部分である。

SNS 上では、「いいね」やリツイートという“報酬”が利用者に与えられる。そのことによって、本来のコミュニケーションのコンテンツ (内容) よりも、コンテンツの単位 (「いいね」やリツイート数) という人気に関心を移行させる。その結果、コンテンツの価値や重要性とは関係なく、クリック数を最大化させるべく、コミュニケーションが「仕立てられる」。そのようなコミュニケーションの自己目的化は、貴重な情報もどうで

もよい情報をもすべてごちゃ混ぜにして、のっぺらぼうに標準化 (キルケゴール的に言えば水平化) してしまう。ストークスはこうした現象を SNS のウイルス的性格と呼ぶ。かくして仮想コミュニケーションばかりが自己増殖するのである。

そこでは、コンテンツの悪しき標準化のみならず、コミュニケーションの非人格化という事態も生じてくる。その悪しき姿が「炎上」の発生であり、「荒らし」や「釣り」の横行である。バーチャル空間の言論が、時に人々のリアルな生活をめちゃくちゃにしたり、死に追いやりたりするが、SNS にはそんな危険性があるというのである。

しかし、このような危険性を自覚して注意深く SNS を利用しさえすれば、インターネットは民主主義の有効なツールであり、人々を双方向的かつ開放的に結びつけ、草の根レベルから情報を発信していくメディアになりうる。ストークスはこのように結論づけている。

キルケゴールの“新作”が出現？

話を脳空間の中のキルケゴールに戻そう。キルケゴールのデータベース、いやデータベースと化したキルケゴール。そこから当然、コンピュータを駆使したキルケゴール研究も現れてきた。例えば、彼のある言葉の使用回数と、それが使用されたセンテンスを検索して抽出し、これらを時系列に一望可能なグラフ上に配して、この時期のキルケゴールはこの言葉をこういう文脈で使用していると解説するような研究がそうである。私は、キルケゴールだけではなく、この種の研究をヘーゲルにおいても読んだことがある。

客観性・正確性を標榜するこの種の研究は、昆虫を展翅板上に並べた標本箱のような印象を与える。確かに昆虫たちはきれいに分類されて並べられている。しかし、その昆虫はすべて死んでいるのである。思想は著作の中に客体化されて存在するとはいえ、それを生きた思想として命を与えることができるのは、生身の人間が主体的にテキストを読み込んだ時なのだ。人文学の研究は、本来そのようなものでなければならない。

キルケゴールは、大学教授たちによって自分の著作がパラグラフ単位に切り刻まれて研究されるだろうと予言した。だが、まさかセンテンスや単語のレベルにまでバラバラにされることになるとは、決して予見できなかった。今日のように、人工知能 (AI) の時代では、もっと恐るべき予想がなされうる。

いつか近い将来、AI がキルケゴールのデータベースを用いて、情報処理のアルゴリズムを駆使し、脳キルケゴールの著作を紡ぎ出すことができるかもしれない。これは決して SF の世界の事柄ではない。すでに音楽においては、AI によるバッハやベートヴェンの“新曲”が作曲されているというではないか。

だが、そうなってしまっても、それが本当にキルケゴールの生きた思想になり得るのだろうか。いや決して。バーチャルリアリティはどこまでもバーチャルリアリティに過ぎない。生きた思想は、生きた人間のリアリティの中でしか生まれてこないのである。

[註]

- (1) パトリック・ストークス「キルケゴールのインターネット批判」(的場敦也訳)、『新キルケゴール研究』第 18 号、キルケゴール協会、2020 年、31～53 頁。